

クローズアップ

「全人医療」をもとに、 地域に愛される病院を

日本パプテスト病院理事長・院長

尼川龍一さん



地域を支え、住民に信頼される病院はどうあるべきなのか。「全人医療」を掲げ、周産期医療から終末期医療まで、地域に根差した医療を提供している日本パプテスト病院（京都市左京区）。「断らない病院」としてコロナ禍の初期から発熱外来とコロナ専用病棟を設置し、コロナ患者を積極的に受け入れ、京都府と京都市からは「コロナ診療の最後の砦」との高い評価も受けた。これからの地域医療をどのように担っていくのか。尼川龍一理事長・院長に現状と課題についてお聞きしました。

日本パプテスト病院とは

当院は、米国南部パプテスト諸教会の寄付により作られた日本パプテスト連盟により1955年に設立されました。目の前に大文字山を望み銀閣寺からも程近い、緑に囲まれた閑静なところです。設立当初、職員は全員クリスチャンでしたが、現在は6%です。イエスキリストの隣人愛に基づく『全人医療』の理念を掲げ、患者さんの体だけでなく心や魂までしっかりとケアすることを職員一同心がけています。

また敷地内に牧師室とチャペルがあり、チャプレン（教会に属さず施設で働く牧師）がキリスト教式の礼拝や朝礼を司っています。そして「周産期医療から終末期医療」まで幅広い診療パートナーを持つ地域に根差した病

院となっております。

——まず、周産期医療の取り組みについてお聞かせください。

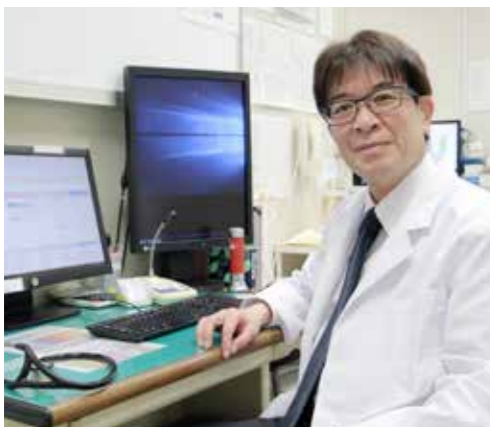
設立当初から当院の周産期医療はよく知られ、祖母、母、娘3代にわたって出産されるケースもあります。京都府から地域周産期母子医療センターに認定され、1995年に京都府下で最初に認可された新生児集中治療室（NICU、9床）があります。また、京都市内において数少ない新生児搬送車を1台所有しており、他の医療機関から他の医療機関に新生児を移送する三角搬送も担い、京都市域だけでなく広域（府外への搬送など）の周産期医療にも寄与しています。

され、リンパ球に複数のタイプが存在する点などが明らかになりました。また、白血病や悪性リンパ腫におけるがん遺伝子が次々と同定されたものもこの頃です。当時の血液内科領域は斬新な風が吹き込む大変魅力的な分野だったのです。このことも血液内科医を目指す原動力となりました。

——その後、静岡市立静岡病院に勤務されましたね。

静岡市は風光明媚な土地柄で、住民の人柄もおおらかで穏やかでしたので、楽しく仕事をすることができました。北先生が「血液内科医には総合的な診療能力が要求される。循環器内科でもしっかりと研修して来なさい」と、自分も研修された静岡病院を紹介してくださったのです。3年間、血液内科と循環器内科でお世話になりました。

当時、そこには異型狭心症が冠動脈攣縮により起こることを世界に先駆けて証明されていた泰江弘文先生（後の熊本大学教授）が在籍されていました。泰江先生からは「科学的好奇心を持つ」ことの大切さを学び、在籍した3年



——終末期医療は。

ホスピスはNICUと同様に1995年に京都府で最初に認可されました。ここでは、オーストラリアで提唱された「ホスピストライアングル」を導入しています。患者さんが望むところで緩和ケアを受けられるように、治療病棟、ホスピス病棟、在宅の3カ所が密な連携を取り、切れ目のない円滑な緩和ケアを提供するシステムです。もう一つの大きな特徴は、チャプレンと多数のボランティアが患者さんとご家族をサポートしていることです。具体的には傾聴、ティーツービス、音楽演奏、アロマセラピー、生け花など多彩な活動をしています。

医師への道

——そもそも、どうして医師になろうと。

私は医師とは全く無縁の家庭に育ちました。父は石油会社を経営しており、大阪市内に本社と5つのガソリンスタンドを所有していました。幼いころ、体が弱く体調を崩したときは父の車に乗って、大阪市浪速区にある自宅から隣の大阪府堺市にある開業医さんに通っていました。先生はテキパキと診察して体を楽にしてください、男前で付まいも格好が良いので、幼いながら憧れて、医者になろうと思いました。

——どんな学校生活を。

中学時代はバレーボール部に所属しました。しかし、私は体が頑丈ではないので膝関節痛や腰痛に悩まされ、3年間、ちゃんとプレーができずもどかしい思いをしました。そんなわけで、大阪府立天王寺高校時代はクラブに

あるオプジーボの開発に繋がった経緯を想うと感慨深いものがあります。

『本庶教授の6C』も学びました。6Cとは、好奇心（Curiosity）を大切に、勇氣（Courage）を持って、困難な問題に挑戦（Challenge）、必ずできるという確信（Confidence）を持ち、全精力を集中（Concentration）させ、諦めずに継続（Continuation）すること。この教えは、今も診療や病院運営において役立っています。

——海外留学で学んだこと、印象的なできごとは。

その後カナダ・トロントのオンタリオ癌研究所に留学しました。ノックアウトマウスの作製で世界をリードしていたTak W. Mak教授（以下タックマック先生）に師事しました。ノックアウトマウスは特定の遺伝子を無効化した遺伝子組み換えマウスです。そのノックアウトマウスを解析することで削除された遺伝子の生理的機能を推定することができました。私は血液内科医として、ホジキンリンパ腫に発現する謎の分子CD30に興味を持ち、本庶研で習得した遺伝子工学の技術を活用してCD30ノックアウトマウスを作製しました。この研究によって、CD30は胸腺におけるT細胞のネガティブセレクションを促進する分子であることがわかりました。

タックマック先生は研究者の自主性を重んじる方でした。カナダが多民族国家であることとを反映して、研究室はとても国際色豊かで自由な雰囲気溢れ、みんな和気藹々と研究に打ち込んでいました。特にヨーロッパからの留学生が多く、彼らとの交流を通じて、人種や国の多様性について学ぶことができました。

また、私が留学した1992年はMLBのトロントブルーージェイズがワールドシリーズを制覇した年です。翌年もワールドシリーズ

は所属しませんでした。

私は一人っ子なので、父は当然私が会社を継いでくれるものと信じていました。ところが医学部を志望していることを知ったときは、かなり怒っていました。しかし、いざ京大医学部に合格すると、各ガソリンスタンドを回り、スタッフに合格したことを嬉しそうに自慢していました。

——京都大学医学部での思い出は。

あまり真面目な学生ではなかったですね。出席の点呼のある講義や解剖学などの実習のみ出席しました。一念発起して、医学部バレー部に入りました。本学ではなく医学部のバレー部なので、しんどかった中学のバレー部ほど体力的に厳しくないだろうとの思いからです。幸いその通りでなんとかプレーでき、キャプテンも務めました。バレーボールに打ち込むことでチームワークの大切さを学びました。1学年下のセッターは現在、循環器内科医として当院で診療に従事してくれています。私は彼のトスでスパイクを打っていました。バレーボールが取り持ってくれた縁ですね。

——血液内科を選んだ理由は。

京大病院第一内科（血液内科）での1年目の研修医のとき、日本パプテスト病院先代理事長、北堅吉先生と出会いました。北先生は面倒見が良く、臨床の基本や血液疾患の診療について熱心に指導していただき、北先生への憧れもあって血液内科を選びました。

そのころの血液疾患領域では、幾つかのブレイクスルーがありました。血液細胞に発現する様々な分子をモノクローナル抗体（人工的に作製された抗体）で検出する技術が確立されたこと、造血幹細胞移植が盛んになりつつあることで、2年間、主治医として複数例の同種骨髄移植症例を積極的に受け持ちました。そして福原先生のお誘いで関西医大第一内科に赴任しました。福原先生は京大第一内科の講師から関西医大第一内科の教授に就任されておられ、私はそこで血液疾患の臨床に携わるとともに、大学院生の研究を指導し、6名の学位論文を仕上げました。

——帰国後、天理よろづ相談所病院、そして関西医科大に。

京大第一内科の医局人事で天理よろづ相談所病院の血液内科に赴任しました。造血器腫瘍に対する造血幹細胞移植が盛んになりつつあることで、2年間、主治医として複数例の同種骨髄移植症例を積極的に受け持ちました。そして福原先生のお誘いで関西医大第一内科に赴任しました。福原先生は京大第一内科の講師から関西医大第一内科の教授に就任されておられ、私はそこで血液疾患の臨床に携わるとともに、大学院生の研究を指導し、6名の学位論文を仕上げました。

——医師人生を振り返って、転機になったことは。

カナダでの留学から帰国する際、本庶先生から「留学で学んだ技術を日本の研究施設に導入してはどうか」と基礎医学研究のいくつかのポジションを提示していただきました。当時はノックアウトマウス作製のノウハウがまだあまり日本には浸透していなかったからです。この提案をお受けしていれば、基礎医学

の研究者としての道のりを歩むことになったと思います。大いに迷いましたが、初志貫徹して血液内科の臨床に戻ることになりました。やはり臨床が好きでしたし、性分に合っていると感じていたからです。もう一つは、本庶先生とタックマック先生の研究室合わせて6年間、基礎医学研究に従事したことでリサーチマインドがそれなりに涵養されているだろう、そしてそれはきつと臨床にも役立つだろう、との希望的観測もあったからです。

病院トップとして

——赴任後行ったことは？
そしていま、力を注いでいることは？

2011年4月、日本バプテスト病院長だった北先生に誘われ、副院長として着任しました。研修医1年目以来、30年ぶりに北先生と仕事をすることになりました。ここで最初に行ったのは無菌室(6室)の造設です。白血



病や悪性リンパ腫などの造血器腫瘍の強力な化学療法を施行することが可能になり、近くの京大病院血液内科と双方向性の密接な連携を取りながら診療に当たっています。現在、私を含め4名の血液内科医が在職し、京都・乙訓二次医療圏における血液疾患入院患者の約5%を担当しています。

——病院経営にあたって心掛けていることは。

病院は、安全・安心・信頼と納得の得られる質の高い医療サービスを提供することが求められています。当院は、日本医療機能評価機構が行う病院機能評価を5年に1度、受審しています。第三者の立場から、当院の運営管理や提供される医療の質を評価していただき、その結果に基づいて改善に取り組んでいます。2022年度には5回目の病院機能評価認定を取得し、1つの項目でS評価(秀でている)を得ました。

2015年に病院長に就任した時には『病院運営の4つの柱』を全職員に周知しました。1つ目が医療安全、2つ目が地域包括ケアを見据えたベッドコントロール、3つ目が接遇の向上、そして4つ目が職場環境の整備です。医療安全とベッドコントロールは医療機関として当然のことですが、当院はイエスキリストの隣人愛に基づく『全人医療』を理念に掲げていますので、接遇の向上と職場環境の整備はとても重要だと考えています。

当院は『断らない病院』を標榜し、敷居が低くアクセスしやすい病院であることを目指しています。許可病床数167床の比較的小規模の病院ですが、小粒でもピリリと辛い(機動性に富む)病院、そして地域社会から信頼される病院でありたいと願っています。

2019年に急性期病棟の1つを地域包括ケア病棟に転換しケアミックス型病院へ

と移行しました。地域包括ケア病棟では、高齢患者さんにしつかりトリハビリを行い、在宅復帰を推進しています。また当医療団は、病院の他にバプテスト老人保健施設、バプテスト居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションもおんも運営しています。これら4施設が一体となって地域と連携することにより、要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けることができるように地域内で助け合う体制すなわち「地域包括ケアシステム」に貢献したいと考えています。

——医師の働き方改革が問われていますが。

医師の長時間労働が問題になっています。「医師は労働者である」と言う原点に立ち返って、医師が健康に働き続けることのできる環境を整えることが大切です。一方、医師の時間外労働時間の上限規制を厳しくしすぎると、診療体制の柔軟性が損なわれる懸念もあります。何が何でも規制ありきではなく、上手にバランスを取ることが大切なのではないでしょうか。この4月から「医師の働き方改革」が始まりましたが、その決められた枠組みの中でどのように医師の勤務体制を整えるのか、各医療機関の手腕が問われています。

——医療の未来への期待と提言を。

「人生100年時代」がやがて到来します。超高齢社会にあつて重要なことは国民一人一人が高齢になつても元気でいられること。つまり健康寿命をいかにして延ばすかが大きな課題です。そのためには、人間ドックや検診センターでの生活習慣病やがんの「予防医療」をさらに普及させることが必要です。

近年、老化の研究が進み「老化は病気であり治療することができる」という新しい概念

が老化研究の分野で広まりつつあります。老化は多くの病気の母、すなわち共通のリスクファクターであることもわかってきています。一つ一つの病気を治療することはもちろん重要ですが、それらの病気の大本(おおもと)である老化を制御できれば多くの病気の発症が抑えられ、そのことが健康寿命の延伸に繋がるはずですが、まだまだ発展途上の分野であり、いままだに老化を治療できるわけはありませんが、老化の研究にもっと光が当てられることに期待しています。

——若い医師へのメッセージを

自分の進む道は自分で切り開いて欲しいと思いますね。そのためには臨床をするにしろ、研究をするにしろ、自分が興味を持っていることを見つけて、自分が大事です。興味の対象が見つければ、とにかくチャレンジして集中的に取り組んで欲しいですね。若いころに「生懸命頭張ったことは大きな財産となり将来にも必ず役立つはずですよ」。

尼川 龍一(あまかわ りゅういち)経歴

1957年大阪府生まれ。京都大学医学部卒業。静岡市立静岡病院、京都大学医学部附属病院第一内科、天理よろづ相談所病院、関西医科大学第一内科准教授、関西医科大学附属滝井病院教授などを経て2015年9月に日本バプテスト病院長に就任。2019年9月に同理事長に就任。内科学、血液学。

一般財団法人日本バプテスト連盟医療団

日本バプテスト病院

〒606-8273京都市左京区北白川山ノ元町47番地。
電話 075-781-5191
認可病床数167床。NICU9床。ホスピス病床20床。